

この世界に居続ける

えんちよう こうち たかし
園長 高地 敬

いっきゅう はなし と
一休さんのとんち話で、「ふたを取らずに」というのがあります。
いっきゅう ひと しょくじ まね うえ なら
一休さんがある人に食事に招かれます。おぜんの上にはごちそうが並
でいます。「いただきます」……するとその主人は、「そのお椀の中身は、
ふたを取らずに食べてください」、というので、一休さんは他のごちそうを
た せき はん なかみ さ
食べてから、「お椀の中身はもう冷めてしまいましたから、ふたを取らずに
あた する か い しゅじん まい
温かい汁に変えてください」と言い、主人は、「参りました。ふたを取って
する か と た
汁を変えますから、ふたを取ってお食べください。」

ふたを取らずに食べられるのであれば、ふたを取らずに汁を変えられる
はずだと言って、論理の矛盾と言いますか、相手の言い方の弱点を突いて
います。言葉遊びのとんちとは別の面白さがあります。ただ、いっきゅう
はなし え ど じ だい つく じつざい いっきゅう ねん
とんち話は江戸時代に作られたもので、実在の一休さんはそれより200年
いじょうまえ ひと ぜんしゅう ひと りんざいしゅう そうりよ きょうと だいとくじ おお し
以上前の人です。禅宗の一つ、臨済宗の僧侶で、京都の大徳寺の大きな仕
ごと ひと とうじ そうりよ どくしん さいし
事をした人でしたが、当時、僧侶は独身でなければならないのに妻子がい
たり、かなり破天荒な人だったので後の社会でも忘れられず、とんち話が
つく
作られるようになっていきます。

いっきゅう ただ いっきゅうそうじゅん こと ぼ ぶっかい
一休さんは、正しくは一休宗純ですが、こんな言葉があります。「仏界
い やす まかい がた かいしゃく ぶっかい ごと
入り易く、魔界入り難し。」いろんな解釈があるようですが、仏界=悟りを
ひら ひと い い かんたん まかい よ
開いた人が行くところに行くのは簡単だけれど、魔界=この世にとどまるの
むずか じょうしきてき ふっかい はい むずか せかい
は難しい。常識的には、仏界に入るのは難しく、この世界にとどまるの
かんたん ぎやく い せかい くる かな
は簡単だとありますが、その逆を言っています。「この世界は苦しみや悲し
み みたし なか い ひと み す ぶっかい はい
みに満ちていて、私はその中に居る人たちを見捨てて仏界に入ってしまう
ことはできない。」一休さんの優しさがにじみ出ている言葉です。魔界にと
どまり、ひと いっしょ くろう じっさい むずか おも
どまり、人と一緒に苦勞するのは実際にはとても難しいことだと思いま
すが、おや こ か ぞく かんけい かぎ おも
が、親子をはじめ、家族の関係もできる限りこのようでありたいと思いま
す。